

## 巻頭言

## 年頭所感

## 附置研究所について改めて考える



所長 西尾茂文  
Shigefumi  
NISHIO

新年明けましておめでとう御座います。国立大学法人化に象徴される流れの中で、皆様にとって良い年でありますように心からお祈り申し上げます。

さて、年頭に当たり、「附置研究所の意義」について再考してみたいと思います。附置研究所とは、「大学に附置することが有意義である研究所」であると理解しています。まず、「研究所」とは、研究者を集団化・組織化することにより研究の飛躍的進展を図ることを目的とした組織でありましょう。この観点からは、本所は、工学領域を総合的にカバーできる研究スタッフと支援スタッフとにより構成されているとともに、分野間の壁を低くして研究者間の相互作用と協同作業とを図る運営方針を実践することにより、専門深化型組織では困難な、分野横断・総合型の先導的工学分野開拓およびその成果に基づく産学官連携等の社会貢献を図る研究所と言えましょう。一方、こうした研究所が大学に附置されている意義については、研究所からみた意義と大学全体からみた意義との双方を考える必要があります。前者については、次のように考えます。上述のような分野横断・総合型の先導的工学分野開拓を図るためには、言うまでもなく自由な発想による基礎・基盤研究が必須であり、それを担保する場としては大学が最も相応しい場であると言えましょう。後者については、以下のように考えます。第一は、大学における教育の重要性が再認識されている現在、研究科教員の教育活動への責務は従来に増して重くなっており、この意味でも学術研究に関するCOEとしての附置研究所の役割は一層重要になっていることです。第二は、本所は、単に基礎・基盤研究を目的とする組織ではなく、「基礎研究に留まることなく実技術への結実を図る」ことを設立当初からのモットーとしており、本所が果たしてきた産学官連携を初めとする大学と社会とのインターフェースとしての役割、そうした場において醸成されるマインドを持った大学院卒業生の輩出の役割などは、現代の大学において必要不可欠な役割となっていることです。第三は、工学系研究科や理学系研究科のみならず、情報学環への協力、農学生命科学研究科と連携した荏原バイオマスリファイナリ寄付研究ユニットの設置、幅広い部局研究者を結んだナノリンクなど、本所が積極的に構築してきている部局間ネットワークは、本学が総合性を発揮するための重要な役割となっていることです。

本所は、今までの実績に留まることなく、自由な発想に基づく「知の創造と蓄積」と、総合的な立場からの「社会課題へのチャレンジとソリューション作り」とを二焦点とした研究教育活動を一層磨き上げ、国際総合研究所として一層の発展を目指すべきだと思います。昨年4月に、坂内前所長から所長職を引き継いだものとして生産技術研究所の一層の発展のために力を尽くすつもりでありますので、宜しくお願い申し上げます。